
事故りました。

レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

事故りました。

【Nコード】

N0860S

【作者名】

レモン

【あらすじ】

事故った主人公がある女の子と出会います。

1（前書き）

処女作です。いや男なので童（殴・・・でしょうかww

いつもど通りの朝だった。

眠い体を起こし、制服に着替え、朝食の準備をしようとしていた。そう、ほんとにいつもど通りの朝だったのだ。

時間がいつもより1時間遅いこと意外は。

『やばい。昨日遅くまで小説読んでるんじゃないかった。』

始業は8時45分、今現在の時間は8時30分。学校までは4キロほどあり、

走ればぎりぎり間に合うかということだった。

急いで家を飛び出し、学校へと走った。

腕時計を確認したら42分。

『何とか間に合いそうだ。』

曲がり角を曲がり学校が見えたという時だった。

ぶつかった。

車に。

轢かれたといったほうが正しいだろう。

「ああ、ちこ……く……」

そこで意識は途切れた。

目を覚ますと白い天井が目に入った。

「知らない天井だ。」

『いや、言ってみたかったんだよ。うん。』

体を起こすと全身が痛かった。

『ああ、轢かれたんだっけ。足とかは折れてなさそうだからそこはマシか。』

窓から外を見ると昼ごろらしかった。

ふと、ベッドの脇を見ると、女の子が椅子に座りながらベッドに顔をうずめて寝ていた。

『…誰だ？顔がわからないけどこんな子見たことない気がする。…記憶喪失だろうか？』

いくつかのことを思い出してみる。

俺は菊池誠也 16歳 趣味はゲームと読書と昼寝 頭、運動神経は中の上

東高校2年3組所属 部活は帰宅部 一人暮らし

親は海外。姉は既婚。

轢かれた日は5月16日、金曜日

『…ああ、すっかり思い出せる。記憶喪失ではだろう。だとしたらこの子は一体誰だろうか？』

起こそうかとも思ったが、気持ちよさそうに寝ている。起こすのは悪いだろうと思って、

「寝よう。」

誰に言つでもなく呟く。

2 (後書き)

恥ずかしくて死にそうです。

3

次に起きたのは夕方だった。

ぼーっとしていて、扉が開く音がした。見ると、入り口にはニヤニヤした親友が立っていた。

「おい親友。轢かれたって話だから見にきたぜ。」

「…ありがとうございます。……質問いいか？ 今何日だ？」

「5月18日だ。」

「毎日来てたのか？」

「まあな。」

「この子誰？」

「彼女曰く、お前を轢いてしまった元凶、だそうだ。」

「元凶？どういう意味？」

「悪い状況を作り出す元となるものだ。」

「言葉の意味聞いてるわけじゃないのはわかってるだろ？」

「自分ででききな。」

「名前は？」

「自分で聞きな。」

「……彼女できたか？」

「できたらいいな。じゃあ帰るわ。その子にやさしくしてやれよ。」

「…今度ジュースでも奢るよ。」

「そりゃラッキー。」

そういつてにやにやしながら親友、桜井孝明は帰っていった。

『さて。どうしたものか。』

昼は気づかなかったが脇の机に通学に使っていたかばんが掛けてあった。

『やっぱり血がついてるな……。中身もひどいな。……。おっ、小説が無事だ。』

暇なので小説を読むことにした。

暗くなってきたところで彼女が目をさましたようだった。

「おはよう。……時間的にはこんばんわの方がいいかな。」

「……んー。……こんにちわ？」

『……寝起きはあんまりよくないみたいだな。しかしさっきは顔を伏せていたからわからなかったが、結構可愛い子だな……。』
しばらく見ていると何かを思い出したように身を乗り出してきた。

「大丈夫!？」

「ああ、たぶん。」

「よ、よがつ」

急に泣き出してしまった。

「!？ おい、大丈夫か？」

「あゝあゝん」

泣くのは止まらず、宥めて話を聞くまでに5分かかってしまった。
まだ半泣きで、途切れ途切れだったりわからにくかったりしたが、
要約すると、

彼女は俺を轢いた車に乗っていたらしい。ちなみに運転していたのはお袋さん。

彼女は寝過ごし、電車では学校に遅れそうだったため、お袋さんに送ってもらっていたのだという。

しかしよく信号にひっかかったために焦ってスピードをかなり出してたそうだ。

そこで角から飛び出した俺を轢いてしまった。

それで罪悪感があり、死んでしまったらどうしようなどと考えていた。

と、いうことらしい。

そこまで話終わるとまた泣き出してしまった。

『……個室でよかった……。』

また宥めながら話しかけてみる。

「……あーっと……飛び出した俺が悪いんだから、そう泣かないでくれ。」

「だって、私が、寝過ごさ、なければ……。」

『……めんどくさいな。こういう自分が悪いと思い込むタイプほど面倒なタイプはそうないだろう。』

しかも可愛い子で泣いてるとなればなおさらだし。……話を事故からそらしてみるか。』

「えーっと、とりあえずいくつか聞いていいか？」

「……うん。」

「知ってるかもしれないが俺は菊池誠也。誠意の誠に也って漢字を

書く。名前をきいてもいい？」

「…加藤 泉。」

「和むって字いる？ いない？ それともまた別の漢字？」

「いない。」

「桜井孝明ってしってる？」

「一昨日と昨日来てくれた子なら。」

「そう。それ。ちなみに今日もきた。あいつどれくらいの間いた？」

「1分から3分くらい」

「桜井からなにか聞いた？」

「名前と菊池くんとの関係くらい。」

「なんて？」

「親友で悪友だつて。」

「だいぶ落ち着いた？」

「え？あ……うん。」

「ならよかった。先生とかよんだ方がいいのかな？」

「…わからない。」

「……。」

「……。」

『「……どうしてですか。」』

扉の開くおとがした。

見ると白衣をきた医者らしき老人が立っていた。

「菊池君。おきたかね。」

『ナイスタイミング。』

心中でニヤリとわらう。

「わしは担当医の黒岩じゃ。」

「よろしくお願いします。」

「医者として言うておくことは……そこまでひどい怪我ではないから……2週間もすれば退院できるじゃろう。」

ただし、安静にしなければじゃ。退院した後もしばらくは安静にすること。これくらいだのう。」

「ありがとうございます。」

そういつて帰っていくと思われた。

しかし扉まで行って不意に振り向いた。

「そうそう。これは医者としてでは無く、人生の先輩としてじゃ。」

「?。」

「女の子は泣かさんようにのう。」

「「えっ!!」」

「ほっほっほっほ。」

笑い声が遠のいていった。

『あのじーさん……いつからいたんだ……。』

彼女に視線を投げると俯いていたが耳が真っ赤だった。

『気の利く言葉がみつからん。……とんだ爆弾投下してくれたものだ。』

「……明日学校大丈夫？」

「……うん。……もう行くね。」

「じゃあな。」

「うん。……また……来る。」

そう言っただけで彼女は帰っていった。

こうして入院生活初日（体感）は終わりを告げた。

5 (後書き)

次完結です

2週間はあっという間に過ぎていった。

桜井は2日と空けず来てくれた。（もちろんニヤニヤしながら）他の仲いいやつも来てくれて、トランプなどをしたときもあった。加藤さんの親さんが来て土下座するから慌てたこともあった。

そんなこんなでも嵐無く過ぎていった。

俺の心のなかの嵐を除けば。

俺は………彼女に恋した。

彼女は1日も欠かさず来てくれ、すこしづつ笑みをこぼすようになつていった。

そんなすこしの笑みに見とれてしまった。

彼女をすこしでも独り占めできるなら退院できなくていいと思ってしまふほどに惚れてしまった。

最終日

退院の手続きをしていると
いつもどおり彼女は来てくれた。

病院を出ながら2人で歩いていった。

「退院ですね。ほんとにすいませんでした。」

「何回も言ってるけど加藤さんのせいじゃないよ。」

「……はい。」

「……加藤さん。」

「はい。」

「……好きです。」

「……え？」

彼女はたっぷりの間の後、顔を真っ赤に染めた。

『言っちゃった。はずいはずいはずいはずいはずいはずいはずいはずいはずい。』
穴があつたら入りたい。時間戻したい。このまま逃げ出したい。今すぐ死にたい。』
ヘタレである。ちなみに顔は負けずと赤い。

「あ、あの、その、

ごめんなさい。」

『フラレタ。アア、ナキタイ。トリアエズ、カノジヨニ、メイワクヲ、カケチャ、ダメダ。』

「そ、そ、そ、そうか。」

「あ、あの、ほんとに、ごめんなさいっ。」

彼女は走って行ってしまった。

呆然として立ち尽くしていると後ろから、

「すごい勢いで逃げて行っただな。ププ。」

「サクライ。」

「2人とも顔真っ赤で面白かったぞ。」

「ナンデココニ。」

「いやあ、ヘタレでチキンなお前が告るなら最終日の2人のときだろうと思ってな。」

「キツイテタノカ。」

「当たり前だ。誰だと思ってるんだ。ま、失恋をバネにがんばりな。」

そう言うと桜井はニヤニヤしながら帰っていった。

「はあ。」

空を見上げる。

「うっとおしいまでの晴天だ。」

6（後書き）

ここまでお付き合いいただいた方
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860s/>

事故りました。

2011年10月8日23時38分発行